

本日の学び:「惜しまず豊かに蒔く」 テキスト:第二コリント9章1-8節

【理解の手がかりとして】

8章～9章は「エルサレム教会のための献金」について記されている。初代の信徒たちの集まりにはエルサレムで宣教を続けるための経済力がなかったため、他の都市の信徒たちは彼らを援助するよう頼まれていたのである。パウロは、マケドニアの諸教会が、その献金の業を積極的に、しかも彼らの非常な窮迫と貧困の中にあっても多額に実践したことをコリント教会に知らせる(8:1-5)。マケドニアの諸教会(フィリピ、テサロニケ、ベレア)とは、パウロが開拓した教会であったと伝えられているが(使徒16:12-17:13)、彼らは当時「苦しみによる激しい試練」(8:2)に遭っていた。そのような状況にあっても、マケドニアの諸教会は献金に励んだ、のであった。

ここで取り扱うテーマは「献金」である。お金に関する奨めは、大変繊細な事柄である。ある人が「その宗教団体の正邪を判断するのは献金について過度な要求を為しているか否かである」と言っていた。確かにその通り、いわゆる「カルト」と呼ばれる新興宗教集団のマインドコントロール、悪徳商法によって身ぐるみはがされた人々の悲劇は数知れない。ここでパウロが推進する献金運動は勿論それとは正反対の清いものである

パウロの主眼は、献金の額ではなく、教会の、信者一人一人の「献身」の度合いである。パウロはマケドニアの諸教会の積極的な献金の業を「神の恵み」(8:1)と呼んでいる。「恩恵とは、奉仕し愛する力である」(NTD注解)という言葉に出会った。私たちはよく「恩恵に与る」という表現を用いる。それはこちらが一方的にいただくもの、という受動的な意味合いで使われるが、しかしパウロの言う「神の恵み」とは、信者に起こった変革である。他者のために奉仕することを喜び、愛する力を得る者へと変革された事実である。

パウロはマケドニアの諸教会の熱心(神の恵みに応答する献身・奉仕・愛の力)を紹介した(8:1-5)上で、コリント信徒らに「エルサレム教会のための献金」を勧める。これは以前に、パウロ自身がコリント滞在中に始めた活動であったが、おそらく他の面倒な問題に巻き込まれ完成するに至らず、あらためてテトス(パウロの同労者)を派遣し、この「慈善の業」(2コリント8:6)をやり遂げようとしている。

この奨励が「エルサレム教会のための献金」という目的のためであるのは明白であるが、それと共に、パウロの牧会者としての心を強く感じる。パウロは牧会者として、コリント信徒の信仰、その愛の純度(純粋さ)を深めようと切に願っているのである。「心」と「行動」、これはいずれも重要で、良い心(動機)の伴わない行動は無益であり、良い行動の伴わない「心」もまた然りである。信仰とは、単なる「心」の問題ではない。「行動」を伴う生き方である。「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」(ローマ10:10)とは、内的「心」と外的「行動」が一致する信仰の実存を言っている。

9章に入ってもエルサレム教会への献金に関する奨めが続く。1節で「聖なる者たちへの奉仕について、これ以上書く必要はありません」と言っているが、パウロの心中やいかに。実はパウロは、マケドニアの諸教会の献金への熱意を誇った(8章1-)ように、コリント教会信徒の「熱意」(9:2)をマケドニアの人々に誇ったらしい。そしてそのことでマケドニアの教会も奮い立ったというのである。ここにパウロの教会(信徒)訓練の術を見る。良い信仰モデルを示し、それに倣うように奨め、鼓舞するのである。

ただしかし、コリント教会の実態が、パウロの思惑(期待)とは齟齬があった模様。それを修正すべくパウロは事前に使者(8:16-)を派遣した。「渋りながらでなく、惜しまず差し出されたものとして用意

してもらうため」(9:5)である。

6節以降がメッセージ性の強い部分。「つまり、こういうことです」(9:6)と前置きして、前段落の真意を伝える。パウロの究極の目的は、「献金」の流通にあらず、「神の恵み」の流通である。神の祝福と神の喜び、ほかでもなく、その御子のいのちを差し出された「神の」である。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」(ローマ8:32)。その神の心の広さと喜びが、諸教会の応答によりますます広がり行くことをパウロは願っている。

本日の箇所からは先になるが、「あなたがたの慈しみが結ぶ実」(9:10)という表現が印象的。慈しみの大小により、刈り入れる恵みの大小も規定される。慈しみ深さには慈しみが帰る。まさに「情けは人のためならず」である。しかしそれは人間間(教会間)の事柄。それも大切だが、パウロにとってより大切な事柄は、やはり「信仰」である。つまり神に対する一つひとつの教会の立ち方(姿勢)である。11-12節で「神に対する感謝」とある。また13節では「神をほめたたえる」ことが強調される。14節では「神のすばらしい恵み」、最後の15節では「言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝します」と終わっている。後半になればなるほど対象相手が「神」になって行く。「わたし」「あなたがた」というパウロと諸教会の関係から、最終的には「神」への感謝、賛美になっていく。これがパウロの期待する信仰的変革である。

神に対して誠実に、その頂いた恵みへの感謝を忘れずに、「惜しまず」ささげて生きて行けば、神の愛と慈しみ、祝福の恵みはますます豊かに経験させていただく、と言える。ねがわくは「真心(見返りを求めない純粋さ)」をもって、そのような神の恵みの流通の中に生きていくものでありたい。

『聖書教育』より

- 『沖繩命どう宝の日』をおぼえる日。平和のために行動している人たちをおぼえつつ、わたしたちにできることを探しましょう。(大人クラス)